

武者小路実篤 『お目出たき人』 論

——主人公における「自己確立」の様相——

楊 琇 媚

はじめに

武者小路の文壇処女作と言われる「お目出たき人」は雑誌『白樺』の創刊に先立つこと二ヶ月、明治四十三年二月に脱稿されたが、枚数が多過ぎたために『白樺』創刊号には載せられず、翌四十四年二月に洛陽堂より単行本として刊行された作品である。西垣勤氏はこの作品に見られる「実に無雑作にして自然な文体、思い切つて自由な表現は、大正文学の幕開けにふさわしいものであった」と評価している。また、「我々は大抵、武者小路氏が文壇の天窓を開け放つて、爽な空気を入れた事を愉快に感じてゐるものだつた」という芥川龍之介の言葉も有名である。

武者小路の第三の恋愛を素材として書かれたこの作品は、主人公「自分」の一人称で語られており、「自分」が見初めた女性に何回もの求婚を繰り返すが、やがて彼女は人妻にな

つてしまふという結末に至る失恋の物語である。大津山国夫氏が「たとえ失恋しても失恋しない人間を造型するのがこの小説の目的であつた」と述べているように、従来「自己形成、自己建設の決意を示す」といつた強烈な自我肯定の作品として扱われてきた。さらに、こういう見方は以下のような武者小路の大胆不敵な発言によつても裏付けられる。たとえば、序文では「自分は我儘な文芸、自己の為めの文芸」と云ふやうなもの、存在を是認してゐる」と述べている。また、「皮肉でも反語でもなく、勿論何等の漫罵でもなく、思切つて『オメデタイ』」という生田長江の批判に対し、彼は、

僕は自分で自分を「お目出たい」と云つた。しかしそれは世間をからかつて云つたのは分り切つたことだ。世間は僕をお目出たく思ふだらう。(中略)しかし見よお目出たく思ふ僕こそ、實は本当の道を歩いてゐるのだ。

と堂々と自分の生き方を主張している。

トルストイによる「禁欲」や「他人のために」といった自己の束縛に常に息苦しさを感じていた武者小路は、メーテルリンクと出会って、ようやく自己の解放を始める。本多秋五氏は、トルストイ熱の最高潮に達した高等科の時期を経て、そこからの脱却開始（いわゆる自己形成の開始）は、大学入学時（明治三十九年の秋）からであるとしている。また本多氏の調査では、この過程を知る材料として、明治三十九年から四十三年にかけてのいくつかの創作が取り上げられているが、四十三年の「お目出たき人」がその中の最後の作品となっている。とすれば、「お目出たき人」は武者小路がトルストイという重荷から脱却する自己形成の最後の過程であって、つまり「自己」を確立させた作品と言えるであろう。確かに、すでに先行研究の言及があるように、主人公による強烈な自己主張が作品中に満ちているし、求婚を何度拒否されても挫折しない主人公の生き方から見ると、作者の自己肯定が存在しているという見方には賛成できる。しかし主人公の自我、或いは自己そのものの確立は、本当に完成していたと言えるであろうか。主人公の極端な自己肯定面ばかりに目を向ける従来の研究では、その反面に潜在している葛藤の姿を見逃してしまう傾向があるように思われる。よって、本稿では、主人公の自我の内実を探り求めながら、主人公及び武者小路に

おける自己確立の様相を解明していきたい。

一 作者と重なる「自分」

実体験に基づき書かれたこの作品は、多くの先行研究に見られるように、「自分」が作者である武者小路自身を表しているものとして読み取ることができると思われる。しかし、この作品のジャンルが小説として規定される以上、果たして主人公をそのまま作者として見なしてよいのかという疑問が残される。つまり、作者と主人公の間に一線を置き、より客観的に本作品を読むべきではないかと考えられるのである。にもかかわらず、「自分」と作者がやはり大いに関連性を持っていることは否定できないであろう。そのため、この時期の武者小路の日記と対照させながら読むことによって、両者の関係を確認しておきたい。

明治四十一年の日記においては、女主人公鶴のモデルとなる「たか」への思いが克明に述べられている。たとえば、「彼女と自分とは、既に他人でないと思ふ。（中略）彼女の家の人が承知してくれば、二人は総ての意味に於て、他人ではなくなるのだ」とか、「彼女と一生他人でなければならぬのか知らんと思ふと不安だ。否もう主観的の彼女は自分にとつて他人ではない」と記しているように、「たか」と話した

ことがないにもかかわらず、武者小路は一方的に彼女と親密な関係を持ったと空想している。同様に作品においても、主人公は「自分は鶴と話したことはないのだ。自分はたゞ鶴の心と自分の心とはもう三四年前から他人ではないと云ふことを信じてゐる」と考えており、武者小路の主観と重なっていることが窺がえる。

もう一つの例をあげよう。「たか」への一回目の求婚を断られた後、淋しい思いを覚えた武者小路は日記に次のように書いてある。

自分にはどうしても彼女が自分を嫌つてゐると思はれない。元より非常に愛してゐると思はないが、どつちかと云ふと愛してゐる方だと信じてゐる。

もし彼女が自分を愛してゐないならば、自分は楽に思ひ切つて見せる、しかし思ひ切つたら、彼女が愛してゐたとなつては困る。

一方、作品中では、主人公は自分が押し強く求婚しなかつたら、「自分の処へ来た程生の快樂と有難味を知らずに死ぬかも知れない。かう思ふと自分は鶴の為に戦ふ時が来たやうな気さえする」と思つている。また鶴と結婚することの裏には、「彼女の為にもそれがいい、ことだと信じてゐた、彼女も

それを望んでゐるやうに思はれた」という意識が見られ、鶴との結婚を自分に都合のいいように解釈する態度が作者の場合と同様である傾向が見られる。このように作者の心境が作品に再現されている例は枚挙に遑がないが、日記にも、作品にも、求婚相手の意識が全く現れてこないことが目立つのである。

こうして、武者小路の「たか」に対する思い込みが、「お目出たき人」の主人公の鶴に対する空想とはほぼ一致していることが分かる。従つて、「お目出たき人」に書かれた出来事のすべてが事実即して書かれたものとは限らないが、主人公の求婚相手に対する主観的意識は作者の意識そのものだということが言えよう。また、後に詳しく検討するが、主人公の自我の主張や世間に対する意識というものも、多くの点で、作者を彷彿とさせるため、主人公を作者に極めて近い人物として「お目出たき人」を読んでいくことは容認されるであらう。

二 自我の主張と發展

作品中、主人公は自我の主張や發展については、求婚相手である鶴や自分の自然観、運命観に基づいて進展していくと考へている。従つて以下では、「女性による自我の貫徹」と

「自然観と運命による自我の貫徹」に分けて、それぞれの要素を順番に検討していく。

①女性による自我の貫徹

物語は、主人公「自分」の赤裸々な心境の告白から始まる。

自分は女に餓えてゐる。誠に自分は女に餓えてゐる。残念ながら美しい女、若い女に餓えてゐる。七年前に自分の十九歳の時恋してゐた月子さんが故郷に帰つた以後、若い美しい女と話した事すらない自分は、女に餓えてゐる。(一)

単刀直入に「女に餓えてゐる」というフレーズを繰り返していることによつて、七年前に失恋した空虚さを満たそうと欲求を訴えている。このように「女に餓えてゐる」といった性欲に関する問題を扱つていふという限りでは「自然主義的」であると山本昌一氏は指摘している。それに対して、本多秋五氏は

「自分」はまた同性愛の経験をも率直に語つている。自然主義者が十の苦悶を通じて一の真実しか告白しえな

ったのに、武者小路は一の苦悶を通じて十の真実を告白している、といつていいところがある。

と述べており、この作品の特色を見出ししている。

こうして、自分のことを淋しく感じている最中、近所に住んでいる若く美しく理想的な鶴と出会つた。

自分はその時分から鶴と夫婦になりたいと思ふやうになつた。鶴程自分の妻に向く人はないやうに思はれて来た。自分の個性をまげずに鶴とならば夫婦になれるやうに思はれて来た。かくて自分の憧れてゐる理想の妻として鶴は自分の目に映ずるやうになつた。(二)

言葉を交わしたこともない女性と夫婦になりたい。それは彼女となら自分の個性をまげずに夫婦になれると思われたからであるという。根柢のない空想であるのみならず、相手の気持ちを考える余裕のない、ひたすら主観的意識の表れである。ここから一人芝居とも言えるこの物語が展開していくのである。

自分の仕事をすて、まで鶴を得やうとは思はない。自分は鶴以上に自我を愛してゐる。いくら淋しくとも自我を

犠牲にしてまで鶴を得やうとは思はない。(中略) 自我を犠牲にしてまで鶴と一緒にならうとは思はない。(一)

しかし、いくら女性に餓えていても、いくら鶴を得ようと思っても、自我を犠牲にすることはできないという。強烈に自我を主張する主人公の姿勢である。このような主人公の姿勢は作品全体を貫いていると言っても過言ではない。けれど、「女に餓えて女の力を知り、女の力を知って、自我の力を知ることが出来た」とも言っており、鶴(女性)は「自分」の自我を主張する一つの力であり、また自我を発展させる一つの力でもあると考えている。つまり自我を犠牲にしてまで得ようとは思わない鶴が、実はその自我を成長させる重要な要素として認識されているのであり、自我の貫徹と愛の獲得との相克は、実際には構成されていないのである。

ただし、前述の「自分の個性をまげずに鶴とならば夫婦になれる」という主観的な思い込みによってこの問題は解消されるため、鶴を強く求め続けるようになるのである。また、山本健吉氏が指摘するように、「『全人間』になることが、彼の自己完成を意味する」^(註)のであり、「自分には鶴と一緒になつて始めて全人間たることが出来るやうに思へた」(八)という部分からも分かるように、結婚と「自己完成」には関連性が存在している。このように自分の主観的意識の中では、

鶴との結婚の必然性が保証されているのである。

これまで見てきた通り、恋愛小説として読まれてきたこの作品は、実は通常の恋愛小説とは異なる性質を持つていたことが確認される。なぜなら、作品において恋愛対象となる鶴の意識、或いは彼女に対する客観的な叙述が皆無であるからである。作品の内容は主人公の鶴に対する理想像と、彼の自我への信奉に留まっており、本作品は普遍的な恋愛小説とは性格の異なるものと言えるであろう。

②自然観や運命による自我の貫徹

自然は男と女をつくつた。互に惹きつけるやうにつくつた。之がために自分は淋しく思ふことも、苦しく思ふこともある、しかし自分は自然が男と女をつくつたことを感謝する。互に強くひきつける力を感謝する。(中略) 女そのものは知らない、しかし女の男に与へる力は知つてゐる。女そのものは力のないものかも知れない。しかし女の男に与へる力は強い。(一)

鶴(女)は自我の主張と発展への力になると考える主人公は、一方で、男性と女性を「互に惹きつけるやうにつくつた」のは自然だ、というふうと考えている。すなわち、「自分」

は女性に餓えており、そうした葛藤の中から、女性を得れば力を得、自我を主張でき、自我を発展させることができるようになると思つようになる。これらはすべて「自然」の働きであると考え、自然の力に感謝し、それを肯定しようとする。このため、彼は「自然は自分をして鶴を話しすることもなくして強く恋し得るやうにさせた」(四)と恣意的に解釈し、だからこそ二度も求婚を拒否されても、鶴への恋愛を空想し続けることが可能となっているのである。

三回目の求婚を断られた時、主人公はまた失望する。しかし、鶴と結婚することによって自分の仕事は「最大の助手を得」、「子孫には自然の寵児が生れるであらう」ことを「自然の命令、自然の深い神秘的黙示」であると主観的に思い込み、再び希望を取り戻している。

しかし一方で彼は、このような自然の黙示を実は迷信だとも自覚しており、以下のように考えている。

自分はこの迷信してゐる黙示に従はないことを恐れてゐる。自分はこのことを父にも母にも云はない。云つた処が笑はれるにきまつゐる。(中略)かゝる迷信を持ち得る自分はいかなる時も鶴と自分とは運命によつて合一されるべしと云ふ希望を持ち得る。(九)

「自然の命令」を第一義とする主人公は言うまでもなく、この主観的な理屈と思われがちの「自然の黙示」(≡迷信)を全面的に肯定する。たとえ、その理屈が鶴との結婚を主目的として自分の中に維持されているのだとしても、その理屈に従ふことによつて自分の意志に忠実であることができるし、自我を主張し肯定することができるため、最重要の思考態度として形成されるのであらう。要するに、主人公は「自然の黙示」が実は迷信であることを自覚しているのであるが、自然に対する意識は自我を肯定する手段であるため、自己の意思が「自然の黙示」によるものであると思ひ込まざるを得ないのである。そして、この意識が存在しているからこそ、鶴への一方的な恋心が五年間も維持されてきたのだと言える。ただし、「自然」に従い、自我に忠実に生きようとするこのような主人公の姿勢は、ひたすら自己主観的な考え方で独善的な方向へ突つ走っている印象が強く、客観性が欠如しているため、その自我の在り方には疑問を感じざるを得ない。

こうして「自然」を後ろ盾にすることによつて、鶴を得ることに励んでいる主人公の姿から、「自然」は自我を発展させるための力になっていゝと思われるのである。

また、上述の自然観と同様に、主人公にとって重要な概念となつてゐるのが「運命」である。三度目の求婚を拒否された後、彼は鶴の心を探り当てる際に、鶴が自分の運命を父と

兄に託す女性であろうと思ひ、「かゝる女に自我はない」と一方的に決めつけている。自分の運命を他人に託す人は自我のない人であると考えていることから、主人公にとって自分の運命を切り開くことと自我の確立には相関関係があることが推測できる。作中における彼の思考からは、運命と自我とを直接的に関連付けて明示している部分はないのだが、ただ、「運命が自分と鶴とを夫婦にしなければおかないやうな気がする」、「運命がお夏さんを恋させて失恋させたのは彼女（鶴のこと——引用者注）と自分を結びつけるためではなかつたらうか」などといった運命に関する考え方から見ると、主人公は運命を利用して、鶴との結婚を合理化、正当化しようとしているように思われる。鶴が自我の主張と発展への力であることについてはすでに述べたが、運命は自然と同様に「後ろ盾」としての作用を持ち、間接的に自我と結びついていることが理解できよう。

以上、「女性による自我の貫徹」（鶴の役割）と「自然観や運命による自我の貫徹」（自然や運命の役割）をそれぞれ分析してみた。本来、これらはいずれも主人公の力の及ばない存在であると考えられるが、しかし主人公にとっては自我を主張、発展させるために必要不可欠な存在となつていてと考へられるのである。

三 自分との葛藤

主人公は「鶴」、「自然」、「運命」を後ろ盾にして「自我」を声高に主張する一方で、自分の内面では激しく葛藤してゐる姿も見せている。以下、それについて見ていきたい。

①世間に対する態度

鶴と夫婦になりたいと考えていることが「話の種」になつて近所の人に冷笑されたり、後ろ指をさされたりすることを気にしているならば、「自分と鶴の幸福を捨てる」ことにもなるため、彼は「近処の人を恐れないで見せる」、またその嘲笑を「平然として甘受して見せやう」と思っている。ここでは、他人或いは世間を意識している主人公の態度を確認しておく。続いて、鶴への思いが叶わないため、淋しく感じている彼の以下のような思考を見てみる。

何しろ自分は恋も味ふことが出来ず、これはと云ふ仕事も出来ず。父たるの喜びも知らず、滅びてゆくやうな気がしていけない。自分はその淋しさをまぎらす為に外に出た。（中略）自分の人格が一段と高くなつたやうな気がする。さうして道ゆく人より自分の方が一段と偉いや

うな気がする。すべての人を憐み、すべての人に同情するやうな気になる。(二)

「自分」は恋が成就されないことや仕事の不調などによつてもたされた淋しさを懸命に抑えようとしている一方で、自己を高めようともしているように描かれている。しかし反面では、彼がそのような在り方からは、ほど遠い存在であることが示されているようにも考えられる。ここでは彼の弱さを垣間見ることでもできると思われる。

世間を恐れる母を克服し、鶴との結婚を承知させた彼は、世間の目を顧慮しないことを決意したはずであったが、同窓会の帰りに鶴と結婚ができたなら自分をからかう人がいるだろうと妄想したり、鶴とうまくいって欲しいと思う反面、「近所の人の嘲笑を」気に行っていることなどから、依然として他人が自分のことを如何に思っているかをかなり気にしていることが分かるのである。

自分は鶴と結婚する為に他人から嘲笑されるであらう。しかしその嘲笑はやがて羨望になり、更に一転して尊敬になり、自分の結婚は理想的結婚のある雛形となり得ると信じてゐる。(十二)

確かに、自己主張の強い主人公は鶴を始め他人の気持ちも少しも考慮せず、もっぱら自分自身の主観によつて行動しているため、一見すると世間を無視し傍若無人であるかのようにも見えるが、しかし実際には主人公は世間体を強く気にしており、すべての行動について自分の正当性を他人に証明しようという意識が存在しているのである。このことは、主人公の自我の深層に、実は不確定の要素が存在していることを意味するのではないかと思われる。

② 性の問題に対する態度

同窓会で、自称道学者の主人公は、「性の問題を戯談にされる」のを不快に感じる。いくら女に餓えていても、友人のように「芸者遊び」をすることが自分には羨ましいとは思われないし、「断じてしないでよそう」とも考えている。主人公には性の問題に対する世間への批判意識が潜在していると考えられよう。

一方で彼は、「淫慾」を「自然の秘密なれと命ずること」と思いつつも、自分が手淫することを大胆に告白する。そして「強いストラッグルの結果」、「手淫を正當なものだと信ずるに至った」と述べており、同じような考え方を持つ人がいることを聞くことによつて「力を得」ている。しかし同時に「汝、手淫する者よ」という声を自分の心の内に聞き、「後ぐ

ら」さを感じるとともに罪の意識を覚えるのである。こうした感覚を無くすためにも鶴と早く結婚したいと思つていう。ここまでは彼の理想的な性欲論が表現されている部分として読み取ることができるが、しかしその後、別の友人と道楽について議論している場面からは、上述の理想論についての主人公の躊躇も感じられるのである。

道楽をする人を「浦山しくも思ふのだらう」という友人の問いに対して、主人公は「さうかも知れない、しかし同情もするよ」と答えている。ここには先述したような確固とした反対の意志は感じられない。そして友人の道楽肯定論に対して、彼は少し耳が痛いと感じ、「しかし僕だつて道楽をしたくないことはない。自分は女に餓えてゐる。華な快樂に憧れてゐる」と告白するに至つてゐる。彼は道楽に対して、決して全面的に反対する立場に立つてゐるわけではないのである。続いて友人が、「しかし面白いこと許りじゃないよ」と言うのに対し、「僕もそれが怖いのだ。さもなければ例の人があんなかつたら遊んでゐるかも知れない」と答える。このような主人公の心境からは、自然の欲求に従つて道楽を肯定することに對する憧れと、それを否定する道学の倫理や道德観、またそれに加えて道楽のもたらす害に對する恐怖などが入り交じり、心の中で激しく葛藤している様子が窺がえるのである。こうした性の問題に對する激しい葛藤は、若さゆえ

の独特の問題と考えられるが、主人公の「自然」に関する概念が、まだ完全には確立されていないことを示すものと考えられるし、彼の立場が揺れていることも分かるのである。

③自我と現実の落差

これまで見てきたように、主人公は執拗に自我を主張し、鶴への求婚を続けてきた。しかし三度目の求婚を拒否された際には、自我と現実の落差に気づき、日記に「目出度し」という新体詩を書いている。この新体詩からは、自我と現実の狭間で激しい葛藤を繰り返している主人公の心境が窺がえるように思われる。

思ひ切れ〜

今となつて彼女のことを思ひ切らざるは

余りに女々し

多くの男に恋さるゝ女

汝のことのみ思ふはずなし

(中略)

我を愛せず？

我が為をはからず？

そを我は真に知るまで

思ひ切らず〜

(後略)

ここでは主人公は対立する二つの人格に分裂しているかのようである。一人は現実を認識している自分であり、鶴が自分のことを愛していないことが明らかになったと考え、諦めるべきことを主張する。もう一人の自分は今までと同じように、あくまでも自我に固執し鶴に対する思いを継続しようとする、いわば現実逃避の自分である。この新体詩は二人の自分による対話とも言えるし、また二人の自分による戦いとも言えるであろう。この現実と自我（非現実）の戦いは、空想の世界にいる自分が「さなり／＼／汝の忠告をきかんには／我余りに目出たし／目出たし／＼／目出たき故に他人と自分を苦しめる程／目出たし」と熟知しつつも、結局自我の勝利に終わるのである。しかし、彼は鶴を求め、自我を強く主張しながらも、現実に対する認識も十分に持つており、その狭間で苦悩していることが明らかであろう。

四 終わりに

主人公の鶴に対する思いは希望と失望を繰り返した結果、やがて鶴が人妻になるという残念な結果に至る。だが、主人公は絶望の悲しみからまもなく立ち上がり、前述の大津山氏の言う、「たとえ失恋しても失恋しない人間」であるかのよ
うに、「鶴が『妾は一度も貴君のことを思つたこととはありま

せん」と自ら云はうとも、自分はそれは口だけだ。少くも鶴の意識だけだと思ふにちがいない」と思いながら、鶴への恋心を再び自分の世界で継続させていくのである。

「するだけのことをしなければどうして我慢が出来やう」と語る主人公の、「自己の意志に忠実であり、その意志——自我に従つて人為で可能な限りの努力を試み」という生き方は、まさに武者小路の生涯を貫く最大の信念であつた「自己を生かす」生き方に繋がるものであろう。この作品が脱稿された当時、鶴のモデルであつた日吉たかはまだ人妻とはなつておらず、武者小路の求婚が続けられていたと考えられている。わざわざ事実とは異なる設定を行ったことには、作者が自然の命令と考える「自己を生かす」ことに忠実に生き、結果はともかくとして最大の努力を尽くすことが重要であることを主張したいという意図があつたものと考えられよう。

【お目出たき人】の脱稿年に、武者小路が書いた「三つ」という感想文に次のような文章がある。

自分にとつて第一なものは自我である、自我の發展である。自我の拡大である、真の意味に於ての自己の一生を充実させることである。（自分の筆でする仕事）^{（註16）}

自我を主張し、鶴との結婚により自我を發展、拡大しよう

とする主人公の行動から見れば、上述の武者小路の意識が反映されていることが分かり、主人公が作者の分身であることはお明瞭となる。だが、その自我の有り様は、自分の理想にのみ傾いており、他人との交流によって自我が拡充するなどといったものではなく、いわば孤立した自我とでもいうべきものである。また、主人公のそうした自我に不確定な部分も存在し、葛藤が見られる一面も看過できないと思われる。

世間への態度や性の問題、自我と現実の落差などについて、主人公が葛藤している様子をこれまで見てきた。特に、世間を強く意識する彼の態度に注目してみたい。

自分は理想的の結婚をし、理想的の家庭をもつて見せ、彼等の鼻をあかしたく思ふ。(中略)自分と鶴の恋は彼等の恋と全然別種であることを事実によって証明して見せる。(十二)

「自分は広義の教育家にならうと思つてゐるのだ。さうして破壊された殿堂のかはりに新らしき殿堂をたてたく思つてゐる。自分は現代の人の頭で罵倒し、心臓でのぞんでゐるものを搜し出して人々に教えたいと思つてゐる」というような、本多氏の言葉を借りれば「エリート意識」や「救世者願望」を持つ主人公にとっては、鶴と結婚し幸福になることに

よつて、自分の考えを是認しない俗世間の人々に自分の正しさを証明して見せることが重要な課題となつており、このため主人公は客観的に物事を判断することができなくなつていのではないかと思われる。このような状況下では、その自我は真の意味で確立したのではなく、むしろ不自然に膨脹している状態にあるのではないかと考えられる。

本多氏はトルストイに傾斜した時期の武者小路と比較して、トルストイを離脱した時期の「お目出たき人」に見られる主人公の強烈な自我のみに着目し、こう述べている。

トルストイの思想に一旦とつぷりと浸されたが、身をもつてそれを切り抜けたところに武者小路実篤の自己確立があった。長編の処女作「お目出たき人」には、理念的ヒューマニズムから絶縁した観察と、徹底的な自己忠誠がある。

武者小路が世間を顧慮する自分を眺め、自分の弱さを描き出したことは、主人公と自分を相対的に捉え、あたかも自分を戯画化しているようであるが、どこかで自分を信じる主人公に近い、すなわち自己を肯定する武者小路像が見られるかもしれない。だが、明治四十四年の雑感では、武者小路は次のように書いている。

なまぬるい室に居る時はさうでもないが、一寸世の風にあれると、世の中のうるさいのに閉口する。弱い人は立つ瀬のないことをしみじみ感じる。強くなりたい。固々しくなりたい。

また同年に、「世間」と題する新体詩に「我は世間を恐れること最もはげしき人を母として生れたり、我はこの呪はれたる性格に打ち克つ為に、世間を軽蔑す、(後略)」とも書いている。武者小路は世間を非常に気にする人間なのである。世間を恐れる性格を克服するため、世間を無視、または仮想の敵として想定している。「お目出たき人」の主人公の態度は、まさしくこの武者小路の態度そのものである。主人公は世間と対抗するためには自我の主張が必要だと考え、強烈に自我を主張しながら一方では世間を気にしないように努力している。しかしそれを完全に達成するまでには至らなかつた。主人公の世間体を気にする意識の存在、また弱気、心配、孤立感やためらいなどの消極的な意識からは、本多氏の言うような「徹底的な自己忠誠」や「自己確立」がなされていたとは考えにくいだろう。彼の「自己確立」はまだ発展途上の段階にあつたと言えるのではないだろうか。

「お目出たき人」の二年後、姉妹作と言われる第四の恋を素材に書かれた「世間知らず」が発表された。しかし、ここ

でも武者小路自身と見なされる主人公には、世間を気にする弱さが見られており、むしろその性質が「お目出たき人」の主人公よりも遥かに強くなっているようにも思われる。しかしながら、女主人公C子との交際により、その世間に対する意識が次第に変化していき、成長した主人公の姿勢も見られるようになっていくのである。こうした世間体を過剰に意識する主人公の姿を描き続けることは、武者小路にとつて、大きな意味を持つ事柄であつたようである。上述した変化に注目しながら、今後も考察を深めていきたい。

テキストの引用は、小学館版「武者小路実篤全集第一巻」〔昭和六十二年十二月〕による。なお、ルビは省略した。

〈注〉

- 1 西垣 勤「武者小路実篤の生と文学」〔漱石と白樺派〕有精堂、平成二年六月
- 2 芥川龍之介「あの頃の自分の事」〔中央公論〕大正八年一月。引用は「芥川龍之介全集第四巻」(岩波書店、平成八年一月)による。
- 3 大津山国夫「お目出たき人」の素材」〔武者小路実篤論―新しき村―まで―〕東京大学出版会、昭和四十九年六月
- 4 松本武夫・福田清人「武者小路実篤人と作品」(清水書院、昭和四十

四年六月)

- 5 生田長江「自然主義前派の跳梁」(『新小説』大正五年十一月)。引用は『近代文学評論大系第4卷大正期I』(角川書店、昭和四十六年十二月)による。
- 6 武者小路実篤「生田長江氏に戦を宣せられて一寸」(『時事新報』大正五年十一月)。引用は『近代文学評論大系第4卷大正期I』(同前)による。
- 7 本多秋五「武者小路実篤——作家と作品」(『日本文学全集23武者小路実篤集』集英社、昭和四十一年六月)。引用は『本多秋五全集第十卷』(葺柿堂、平成八年二月)による。
- 8 たとえば、明治四十年の単行本『荒野』の大部分。明治四十一年の単行本『荒野』の一部分と文集『潔の日記』の大部分、また日記集『彼の青年時代』の後半と感想評論集『若き日の思索』のこの年の部と短篇『芳子』。明治四十二年の文集『潔の日記』の一部分と感想集『生長』のこの年の部、また感想評論集『若き日の思索』のこの年の部と戯曲『或る家庭』、単行本『おめでたき人』付録の短篇。明治四十三年の中篇『お目出たき人』などが列挙される。
- 9 しかしこういう見方に異を唱える寺沢浩樹氏は、この作品を虚構的作品として捉え、「作品の虚構性の問題を、書く過程における伝記的事実から作品的現実への変容の様相の問題、つまりいかに素材が作品化されたのかという問題として検討」を行った。(『お目出たき人』の虚構性——素材の作品化の問題をめぐって——『日本文学論叢』昭和六十二年三月)
- 10 武者小路実篤『彼の青年時代』(『叢文閣』大正十二年二月)に収めた日記である。引用は『武者小路実篤全集第一卷』(同前)による。
- 11 山本昌一「『お目出たき人』ノート——私小説の系譜——」(『国文学論叢』昭和五十六年十二月)
- 12 本多秋五「武者小路実篤と志賀直哉」(『文章講座第六卷 文章鑑賞』河出書房、昭和三十年二月)。引用は『本多秋五全集第五卷』葺柿堂、平成七年二月)による。
- 13 また山本氏は、自然主義文学の代表作である『蒲団』を取り上げて、「お目出たき人」との相違を比較し、こう語っている。「竹中時雄は「性慾と悲哀と絶望と」に襲われている。これに対して「お目出たき人」の主人公はこの「絶望」はない。「お目出たき人」には絶望に安住しないで生き抜こうという活力がある。」(同前)
- 14 山本健吉「武者小路実篤の女性観——『お目出たき人』の自分——」(『文芸』臨時増刊号、河出書房、昭和三十一年五月)
- 15 注4に同じ
- 16 引用は『武者小路実篤全集第一卷』(同前)による。
- 17 本多秋五「武者小路実篤の『自己』形成期」(『解説』『武者小路実篤全集第一卷』同前)
- 18 本多秋五「武者小路実篤——人と文学」(『高校コース』昭和三十年六月)。引用は『本多秋五全集第五卷』(同前)による。
- 19 武者小路実篤『六号雑感』(『生長』洛陽堂、大正二年十二月)。引用は『武者小路実篤全集第一卷』(同前)による。
- 20 注19に同じ